

発掘調査速報

小金井市 平代坂遺跡の横穴墓の発掘調査

(東京学芸大学)

日高 慎

はじめに

前回の『東京の遺跡』No.122で、小金井市教育委員会の高木翼郎氏が「小金井市 平代坂遺跡の発掘調査」として中世面の調査速報を載せている(高木2022)。遺跡が発見された場所や過去の調査の概要については、そちらを参照していただきたい。この調査で非常に特徴的だったのは、立川面において確認された中世の検出面の黒色土層が良好に残っていたことである。隣接する梶家によって、ながらく保存されてきた場所だからこそ、当時の遺構面が削平・掘削されることなく良好に検出されたと感じられた。

今回紹介する横穴墓が確認されたのは、高木氏が報告した発掘調査範囲の北側の国分寺崖線の斜面部である。立川面にかかる部分では地下式坑が1基確認されているので、国分寺崖線の斜面を下りきった段丘面が中世の人びとが利用するエリアとなっていたようである。高木氏が報告した発掘調査については、2022年3月26日に見学会が開催され、多くの市民等が訪れたと聞き及んでおり、一般の方々の関心の高さがうかがえる。また、見学会当日には梶家所蔵の板碑も展示されたそうであり、今回発見された板碑もども小金井市の中世を語るうえで極めて重要な資料群となった。

中世面の調査の折に発掘現場を訪れた際、すでに開発部分の国分寺崖線斜面部の樹木は伐採されており、地形がよく分かった。周辺の宅地となっている場所の状況と比較すると、その場所は土地の改変があまり行われていないように思われた。1970年に発見された前原横穴墓とも近在することから、現地を高木氏と話をした際に、斜面部で横穴墓が出てくるかもしれないと話していた。ただし、1970年に発見された前原横穴墓とは(肥留間ほか1973)、東側に200mほど離れた場所であった。

1. 横穴墓の概要

発見された横穴墓は、墓道(前庭)、羨道、墓室からなる。墓道(前庭)の堆積状況をみると、ローム土を掘削した後に、ローム土混じりの土で半分ほど埋め戻している。調査時の所見では、この土層は突き固められたように硬かったということである。その後は黒色土で埋

まっていた、それは自然堆積土のように思われ、突き固められたのではなかったように観察された。下位のローム土混じりの土については、半分ほど部分的に黒色の土層が見られるので、ローム土の埋め戻しについて、時間差があるのかもしれない。すなわち、半分ほど埋め戻したのちに草木が生えるなど表面が土壌化するような状況を経て、さらにローム土混じりの土を埋め戻すといった2回の工程があった可能性がある。それは、埋葬人骨が2体であったという事実と対応しているのかもしれない。

細長い墓道(前庭)には、上述したローム土で埋め戻された上面で須恵器広口壺が出土している。須恵器の周りの土は黒色土であり、自然堆積土の様に観察された。羨門部は、人頭大あるいは拳大の川原石によって閉塞されていた。詳しく観察すると、上述した墓道におけるローム土主体の埋め土の上位面に閉塞石が噛んでいるような状況で検出されていたので、墓道の埋め戻しと閉塞が一体で行われたと感じられた。閉塞石の積みなおしといったことがあったかどうかは未詳である。

玄室には人頭大の川原石が敷き詰められており、その上に埋葬が行われていた。出土した埋葬人骨は2体であり、いずれも頭を東側にした伸展葬である。手前側の人骨の方が残りはよく、奥側の人骨は胸部および脊椎の残りが悪い。棺などは当初からなかったと思われ、副葬品も発見されていない。人骨の性別や年齢など人類学的研究はこれからであり、DNA分析や年代測定など多様な検討をおこなう必要がある。2体の埋葬者に血縁関係があるのかどうか、結果を待ちたいと思う。

2. 平代坂横穴墓の年代と意義

埋葬された2体ともに、装身具や鉄鏃なども副葬していなかった。墓道(前庭)に置かれていた須恵器広口壺が年代を決める要素となるが、墓道(前庭)の埋め戻し状況などを詳しく検討した上で、須恵器の年代との比較をする必要がある。墓道(前庭)に須恵器壺・甕類を置くという共通した儀礼が多摩市中和田横穴墓群などでも多く確認されるので(池上2017b)、年代を含めて検討する必要があるだろう。

小金井市前原横穴墓について考えたときに参考にしたのが三鷹市野水橋1号横穴墓であったが(三鷹市遺跡調査会2017)、両者が非常に似た形態をもっていたことから、時代的にも共通していると考え、7世紀末～8世紀初頭を前後する時期と理解した(日高2020)。

平代坂横穴墓の構造や形態などを、小金井市教育委員会に提供していただいたデータをもとに、前原横穴墓・野水橋横穴墓と比較したのが表1である。三者が非常に似ていることがわかるだろう。唯一平代坂横穴墓の墓道(前庭)が非常に長いことがある。ただし、これは平代坂横穴墓の残存状況が極めて良好だったためであり、他の二者は墓道(前庭)前面が確認できていないことによる。平代坂横穴墓のデータは、正式報告で訂正される可能性もあるが、おおむねこの数値は間違っていないだろう。若干の違いをいえば、前原横穴墓は玄室幅が他の二者より広く、やや横長の形態をもち、羨道長と羨道幅も他の二者より長い。この違いが年代差を示している可能性もあるが、それよりも三者の共通性を確認しておきたい。

表1 平代坂横穴墓・前原横穴墓・野水橋1号横穴墓の比較

	平代坂横穴墓	前原横穴墓	野水橋1号横穴墓
全長	10.85	5.0	5.1
玄室長	1.9	1.8	1.85
玄室幅	2.05	2.5	1.8
玄室高	1.05	1.15	1.0
天井構造	ドーム状	ドーム状	ドーム状
玄室床面	平ら	コの字状	コの字状
玄門幅	0.7	0.94	0.8
玄門高	0.45	0.57	0.7
羨道長	1.65	1.9	1.25
羨道幅	0.55	0.9	0.6
羨門幅	0.6	0.56	0.6
羨門高	0.55	0.5	0.82
墓道(前庭)長	7.3	1.3	2.0

単位はm(平代坂横穴墓の数値は訂正される可能性がある)

池上悟氏は、胴張復室の国分寺市内藤新田横穴に始まる第1段階から第3段階までの変遷を提示しており、野水橋1号横穴墓は第3段階の一番新しい時期と考えている(池上2017a)。三者の横穴墓はおおむね同じ時期に築造されたものと推察され、松崎元樹氏編年のⅢ期ころ(松崎2006・2010)、おおむね8世紀前葉を前後する時期と考えられるだろう。

平代坂横穴墓は、多摩地域における最後の横穴墓の一例として認識できる。古墳時代社会が終わりを告げ、律令国家へと展開していくなかでの貴重な墓制の資料を提供した。かつて、前原横穴墓の被葬者を水・陸上交通の管理を担った人物であるとの評価をおこなったが(日高2020)、平代坂横穴墓が確認された現在、小金井市域でも横穴墓が群在



写真1 平代坂横穴墓上から

する可能性が高まった。副葬品をもたないということから、前原横穴墓との共通性を認識したい。前原横穴墓の被葬者は壮年期初めの女性とされており(肥留間ほか1973)、平代坂横穴墓の被葬者が果たして男性だったのか女性だったのか、さらには血縁関係なども調査できると、古墳時代社会の理解が進むものと思われる。

おわりに

ここまで、新たに発見された平代坂横穴墓について、その概要と横穴墓築造の意義について若干の考えを述べてきた。約50年ぶりに小金井市で横穴墓が発見されたのだが、隣接地で横穴墓が確認できる可能性も残っている。はたしてこの地域で何基の横穴墓が築かれたのか、小金井市教育委員会と連携しながら確認調査ができればと考えている。

執筆にあたり池上悟氏、高木翼郎氏、中島将太氏、野口淳氏、紺野英二氏にご教示を頂いた。末筆ながら感謝申し上げます。また、遺跡名や横穴墓の数値は今後変更される可能性もある。

引用・参考文献

- 池上悟2017a『野川流域横穴墓群における野水橋横穴墓群』『野水橋遺跡・野水橋横穴墓群』pp.117-122 三鷹市遺跡調査会
- 池上悟2017b『東京都多摩市中和田横穴墓群発掘報告書』立正大学博物館
- 小金井市史編さん委員会2019a『小金井市史 資料編 考古・中世』小金井市
- 小金井市史編さん委員会2019b『小金井市史 通史編』小金井市
- 高木翼郎2022『小金井市 平代坂遺跡の発掘調査』『東京の遺跡』122 p.1 東京考古談話会
- 日高慎2020『小金井市前原横穴墓の築造とその背景』『芙蓉峰の考古学Ⅱ』pp.161-170 六一書房
- 肥留間博ほか1973『平代坂B』小金井市教育委員会
- 松崎元樹2006『古墳時代終末期の地域構造』『考古学論究』11 pp.117-135 立正大学考古学会
- 松崎元樹2010『東京都・埼玉県における横穴墓の特性』『横穴墓と古墳』pp.124-144 東北・関東前方後円墳研究会
- 三鷹市遺跡調査会2017『野水橋遺跡・野水橋横穴墓群』立正大学博物館2016『第11回特別展 横穴墓』



写真2 平代坂横穴墓墓道須恵器出土状況